

「自殺者ゼロ」についての自死遺族アンケート

- ◆対象：大阪府内で開催している遺族の分かち合いの会などに参加している自死遺族
「ふきのとうの会」・「東大阪市分かち合いの会」・「いのちの集い」・「はまかぜのつどい堺」
・「土曜日の集い」・「カウンセリングスペース『リヴ』」
- ◆方法：聞き取り2か所 アンケート回収8人
- ◆期間：平成25年6月22日～7月12日

「ゼロ」という表現についての印象

- 自死とは、あってはならないものという、誤った考え方が込められていて、違和感・不快感がある。
- 「数」を聞くと嫌な感じがする。愛する人を亡くしたものとしては割り切れない。キャッチフレーズにしたいなら数字を出さないでほしい。
- なくした直後の人を見ると、つらい。「どうして私は助けられなかったのか」と、責められているように感じる。
- 自殺者数「1500人以下」にしてもその数値の明確な根拠はないだろうし、目標とはいえ「ゼロ」なんて誰が考えても不可能。
- 数値目標をあげても自殺者数をゼロにできるわけでもないのに、「ゼロ」と言われると違和感がある。
- 「ゼロ」と言われると、絵空事のような。思いやりのない表現。ありえない。「1500人以下」の方が現実的。

行政機関が「ゼロ」メッセージを出すことについて

- 世間一般に、自死への誤解と偏見を増長させてしまう。
- 「ゼロ」を目指すというのなら、「自死遺族ゼロを目指す」の方がいい。
- 「自死者をなくす」という言葉に替えた方が良い。
- ゼロというよりも、「生きやすい世の中」を作る、というメッセージの方が間接的でいい。
- 目標として「人数」を打ち出すのはイヤ。出すなら「ゼロにできる社会に」などにしてほしい。
- メッセージを出すという事については賛成。遺族は未だに、好奇心の目でみられたり、偏見の目を向けられたり、誰にも語れない死を 心の中にしまい込んでいる。追い詰められている人、孤立している人に、届くメッセージを。

自殺予防対策の広報の表現について

- 「自殺予防」とか「自殺防止」という表現で苦しみが再び感じられる。
- 自死遺族は「防げるのに 防げ(が)なかった人」と責められているように感じる。
- 自殺という言葉は、聞くと心苦しくなる。「殺」という字を違う字で表現できないか。
- 「自殺」から「自死」へ。まずは、この言葉の改革が第一。
- 「自殺者」3万人、3万人と言われると、自分の存在はちっぽけに思える。
- 遺された側に思いやりのある、優しいメッセージを。
- 駅などで見かけたポスターなど、誰に向けて発信しているのかわかりにくい。
- 様々な自殺の原因をひとくくりにして、「ひとりで悩まないで専門の相談機関に行ってください」や、「温かく寄り添いながら 専門機関への相談を勧め見守りましょう」という表現が多い。